

# Book Review

## 月刊「歯界展望」別冊 根分岐部病変 ～臨床対応とエビデンス～

鷹岡竜一・牧野 明 編著



Reviewer

中川種昭 Taneaki Nakagawa

(慶應義塾大学医学部 歯科・口腔外科学教室)

A4 判変、168 頁  
オールカラー  
定価 (本体 5,800 円+税)  
医歯薬出版刊



時代は、“抜いてインプラント”から“できるだけ天然歯を保存したい”に向かい始めているように思う。本書はそのような状況下で、歯周病治療の最後の難関ともいえる根分岐部病変に対して、真正面から挑戦した症例を数多く使用して、その解決法を提示した珠玉の一冊である。

根分岐部病変は主に歯周病だけに由来すると思われがちであるが、歯周病だけでなく、齲蝕、歯内病変、咬合性外傷、セメント質剥離などがその原因として重要であることをいろいろな視点から述べている。

また、成功例だけでなく、時間経過とともに失われていく根分岐部病変罹患歯が正直に示されており、典型的な歯周病テキストにみられるような、いわゆる“教科書的”ではなく、実際の臨床で多く経験する根分岐部病変の治療の難しさを誠実に示していることに感動させられた。「可能なかぎり歯を保存する」という本書のコンセプトが

随所に活かされている。

I編では、「コンセプトと基礎知識」として根分岐部の解剖に多くのページを割いている。続いて、根分岐部病変の分類、基本的な処置法がイラストによりわかりやすく解説され、そして、治療に関する文献考察が一章にまとめられており、臨床で参考となるであろうエビデンスを収集することができるため、初学者にとって知識の整理がしやすい。これらが起承転結の起の部分にあたる。

II編では、「臨床的アプローチ」と題して、実際の治療法について多くの臨床例を通して学べる。歯周病による根分岐部病変へのアプローチは、「上顎編」「下顎編」の二編で構成され、非外科症例から、分割治療、そして再生療法まで幅広い症例提示があり、また歯周-歯内病変、歯根破折、穿孔、力による根分岐部病変の考察もなされている。

また、根分岐部治療後の、患者自身によるケアの利便性、容易性まで見据えた補綴設計の必要性について一章分をあてて解説していること、インストゥルメンテーションについては歯科衛生士界のベテラン術者が手技や視点を解説していることも興味深い。

III編では、長い臨床経験をおもちの二人の巨匠による長期症例から貴重な情報を得ることができる。根分岐部病変に対応しながらも、20年、30年という長きにわたる経過観察が示されていることは、自分の臨床における予後予測にたいへん参考になった。さらに巻末には、多くの歯科医師が疑問をもつ点について「私の疑問・根分岐部病変」と題し、Q & A方式で明らかにしていることも興味深い。

「根分岐部病変」について網羅された本書は、若い世代から、ある程度経験を積んだ世代の読者まで、幅広い支持を受けるであろうと確信する。